

大山とともに生きる

大山王国 石村隆男

近年、「**大山の恵み**」という言葉が耳にすることが多くなりました。一般的な表現では“自然の恵み、天の恵みをいただいて人は生きている”と著しますが、当地にあっては、大山はまさに「自然」であり、「天」そのものだと思います。そう考えると、私達の生命(いのち)は、“大山からの賜物(Gift)”と言っても過言でないのかもしれない。

4年後の平成30年に「大山開山1300年祭」が開催される予定ですが、この祭事は神代の時代から現代に至るまで、私達がいただいていた「大山の恵み」の歴史をあらためて確認し、感謝し、その恵みを将来の子孫たちへ繋げていく大切な行事になることと思います。この機会に「大山」を地域の座標軸の真中に置き、森羅万象すべての恵みを座標にプロットし、俯瞰してみましょう。きっと当地の過去、現在、そして未来のカタチが浮かびあがってきます。それは「大山とともに生きる」ことを確認する作業にもなるはずで

ランドマークとしての大山

言うまでもなく大山は伯耆の国を代表する山で「伯耆大山」と表現されることが多いですが、古より中国地方を代表する山であり、西日本を代表する山であり、東の「富士」と並ぶ日本を代表する山のひとつでした。米子を中心とする西伯耆や出雲の西方から望む大山の山容は富士山によく似ていることから「伯耆富士」・「出雲富士」と親しまれてきました。地元では「大山さん」と敬称をつけて呼んできました。



大山放牧場



妻木晩田遺跡の夕焼け

大山の麓には**妻木晩田遺跡**など2000年以上前の弥生遺跡が点在しています。それらの遺跡から大陸との交易を示す発見も数多くされていますが、大山をランドマーク(目印)にして航海してきたことが想像できます。山麓・淀江の稲吉角田遺跡で発掘された弥生時代中期の壺には舟を漕ぐ人々の絵や大型の高床建物(櫓)のようなものが描かれています。これはまさに海の交流があったことを示しています。当時、淀江は大陸からのゲートウェイであったことは間違いありません。

現在でも大山は大陸からのゲートウェイになっています。大山上空付近は航空路のクロスロードで、成田、関空などと大陸(韓国や中国北部)を結ぶ航空機は必ずこの周辺を飛びます。そう、大陸からやってきた旅客が日本で最初に見る大地は、実は大山です。どうやら、数千年の歴史を超えて、大山は日本のランドマークでありゲートウェイの役割をしているようです。

近年では日韓口定期貨客船(DBSフェリー)や多くのクルーズ客船が境港に寄港していますが、その入出港の際に見る海越しの大山の美しさは、当地のランドマークとして旅人たちの心に刻まれることでしょう。同様に国際路線もある米子空港を発着する旅人たちも大山の大パノラマを上空から望み、深い印象を持つことでしょう。また陸路や鉄道にとってもゲートウェイのランドマークとなっています。交通アクセスセンターの機能を持つ米子市を基点としたJR山陰線や伯備線、山陰道や米子道の高速道路など、まさにランドマークの大山を回り込むようにして、デザインされています。大山は見る方向で山容が大きく変わっていきませんが、旅人

にとって、そのダイナミックな変化は驚くほどに新鮮ということです。

大山は西伯耆だけでなく、東伯耆にとっても大きな存在・ランドマークです。朝日に輝く大山は、倉吉市を中心とする東側の地域だけのもの。倉吉は「遙かな町」という表現をされますが、まさに遙かなる峰・大山を望むことに由来しているのでしょうか。伯耆国府がこの地に置かれた理由もわかるように思います。大山寺と同様に約1300年の歴史を刻む**三徳山三佛寺**（三朝町）の修験の道に建つ文殊堂や地藏堂の回廊からは大山を遠くに望むことができます。大山は真西になりますので、ここでは遙かなる峰・大山に沈む夕日を拝むことができそうです。

マインドマークとしての大山

120年前に松江に住まいした**小泉八雲**は、その著書（神々の国の首都）の中で繰り返し大山のことを記しています。大変印象が強かったようで、神々の国の首都である出雲國には欠くことのできないランドマークに感じたようです。文章の一部を紹介します。『途方もなく素晴らしい夢まぼろしの姿だ。大橋から東のかたを眺めると、大空の果てに鋸の歯のような刻みをつくりながら、或は緑に、或は青く、きびしい線の美しさを見せる山並みを越えたさらに向うに、光に包まれた幻が一つ天にむかってそそり立つ。-中略- 下のほうは透き通った灰色、上の方は霧に包まれて白く、万年雪が夢かと思えるほどに**美しい幻の峰**。それが巨峰大山である。これこそこの魅力あふれる出雲の國でも一つしかない最高の眺めである。-後略-』 当時の町人は大橋川の水で身を清め、朝日が昇る大山を向いて拍手を打ち祈り、そして出雲大社のある西を向いて同様に祈ることが習慣であったようで、そのことも驚きをもって八雲は記しています。そのことからわかりますが、大山はランドマークの域を超えて、祈りの対象になっており、まさに「マインドマーク」と表現したくなります。

約1300年前に編纂された出雲風土記では大山のことを



中海の夕日 米子城址から



鍵掛峠からのぞむ大山南壁

「**火神岳**」と表現していますが、この時代以前から“神”の山ということで人々の信仰の対象になっていたことがうかがえます。同時期に大山寺が開山されましたが、この時代以降は神仏が集合し、さらに信仰を集め、全国でも指折りの“祈りの山”となっていたようです。1000年前には160もの寺院が並び、絶大なる力を持っていた時期もありました。時代の変遷の中で盛衰はありましたが、時空を超えてマインドマークとしての大山はその輝きを失うことはありませんでした。現在でも、多くの方にとって大切な、大切な心の拠り所です。

ネイチャーマークとしての大山

国立公園として知られる大山は、全国的にも貴重な自然が残されている山でもあります。昭和11年、全国で第3番目の国立公園となりましたが、雄大な山容はもとより、広大なブナの森、そこにやってくる数多くの野鳥や昆虫など、豊かな自然環境は現在でも日本を代表するナショナルパークであり、ネイチャーマークです。先般、大山の山頂付近でヒメボタルが確認されましたが、大山独特の生態系はまだ知られていないものも多い。生物多様性・自然環境の保全が世界的課題とされていますが、大山はそのシンボリックな存在になりえる場所でもありそうです。

昨年、米子市を中心に「エコツーリズム国際大会2013in鳥取」が開催されました。海外からの参加者も含め沢山の方に参加いただき、当地の自然、歴史、文化についてエコツーリズム的な視点で検証していただきました。大会のテーマは「森・里・海、水の連環と人々の営み」ということで、森と里と海の繋がり・連環について議論を深め、エクスカージョンでその連環を実感いただきました。「**森は海の恋人**」と表現されますが、当地のフィールドは大山と日本海（美保湾）が近接しているため、その繋がりを目でも身体でも感じるができます。「**大山ブナの森ウォーク**」「**大山ダウンヒルサイクリング（森から海へ）**」はネイチャーマークとしての大山の自然連環を体感できる大人気のプログラムとなっています。



晩秋の落葉したブナの巨木

大山は無垢の自然ということはありません。人とのかかわりの中で育まれた自然で、私達の暮らしと絶妙なバランスで保たれてきました。日本の「**里山～Satoyama～**」の役割（伝統的な地域の知識や知恵、慣習が、生物多様性の保全と自然資源の持続的な利用に向けて大きな役割を担うこと）が、国際的に注目を集めています。大山をその視点で見るとまさに**大きな里山**で、日本ならではのネイチャーマークです。

グルメマークとしての大山

「食のみやこ鳥取県」ということで、鳥取県として食の豊かさを全国にアピールする活動が進められています。中でも、鳥取県中・西部地区の食材の多くは「**大山の森の恵み**」と言い切ってしまうのも過言ではありません。おいしさの源は「水」と云われていますが、その水を育むのが大山の森です。西日本最大のブナ林に降った雪や雨は、大山ならではの大地の天然フィルターを通して磨かれ、ナトリウムやカルシウム、さらに鉄イオンなどのミネラルが絶妙なバランスで含まれた美味しい天然水を作り出します。極上の軟水で、これを求めて大手飲料メーカーも複数進出しています。ちなみに、鳥取県はミネラルウォーターの県別の出荷量では山梨、静岡に次いで全国3位となっています。山麓各市町村の水も大山の地下水ですが、米子の水道水は、2009年11月のサンデー毎日「日本一激ウマの水道水はココだ!」において、「専門家が絶賛する『よなごの水』」と紹介されたほどです。

大山の水は飲水だけでなく、山麓すべての生物の生命の源です。森の山菜も、里に育てられる米や梨などの農産物や畜産物も、さらに日本海（美保湾）の海産物なども大山の森から供給され、大地で磨かれた（活性化）水のおかげもあり、本来の美味しさを活性化させています。まさに、海の恵み、大地の恵みは「**大山の森の恵み**」です。当地では生命を司る水の連環について多くの方が理解するようになりましたが、その大山の森は人の意思で守られてきたことも

知っておきたい。出雲風土記では「火神山」と表現されたことからわかりますが、神代より神の山として崇め、先人達が大山の森を守ってきました。そのお陰もあって、恵みの源である広大なブナの森が現存しています。先人達への感謝、そしてこれを子孫にバトンタッチしていくことも心しておきたいものです。

グルメマークとしましたが、「**大山**」は**全国的なグルメブランド**になってきました。その代表が「**大山どり**」。首都圏では特に人気で、大山どりの焼き鳥専門店のフランチャイズ展開が大変な勢いで進んでいます。他にも大山乳業、大山ハムなど大山のタイトルがついた食材や加工品も人気です。今春には全国的に有名な高級和菓子の工場が大山の麓に進出しましたが、これは大山の水と鳥取県の食材を求めてということで、まさに、グルメマークとしての大山に光が当たりました。

大山の麓にはいくつかの漁港がありますが、その代表は全国3位（H25年）の水揚げ高を誇る境港です。近海（美保湾）の魚介類も多く水揚げされますが、これなどはまさに大山の森の恵みです。海の世界連鎖の底辺を支えているのは海藻や植物プランクトンですが、これを育むのが大山の森が源の「水」。近年、森と海の水の連環について科学的にも確認されてきましたが、大山の麓の海岸で採れるワカメなどの海藻類や海藻を餌にするサザエなどが格段に美味しく、そして豊富であることは、その証でもあります。

インダストリアルマークとしての大山

「大山の恵み」となると「食」のことが中心になりがちですが、工業製品などもその恵みをいただいているものもあります。山麓には大手液晶メーカーの工場がありますが、世界的に先進的なディスプレイを製造することになったことで話題になっています。材料などで大山産というものはないようですが、液晶を洗浄するのに大量の水が使われているということで、ここでも大山の森で育まれた水が活用されています。お手元のスマートフォンのディスプレイは実は大山の水



奥大山 木谷沢



榊水高原からのパノラマ

で洗浄された“クリーンド・イン・大山”のものかもしれません。

あまり知られていませんが、**大山山麓は日本刀発祥の地**とも言われています。日本刀の特徴は反りのあることですが、この反りのある刀を初めて作ったのが、大原安綱とされています。(個人名が確認されているなかでは、わが国最古の刀工) 平安時代初期に大山の麓(伯耆町大原、また米子市日下など諸説あり)に住み、刀工集団を形成していたということです。

天下五名剣の一つ「国宝童子切安綱」は安綱の作で、現在でも東京上野の国立博物館に展示してあります。千年を超えてもおその輝きは衰えることなく、目を見張るほどです。日本刀発明の背景は、大山を包み込むように流れる日野川流域が優れた砂鉄の産地で、**たたら製鉄**が盛んであったこと、またこの刀工集団をささげるスポンサー的存在として当時強大な勢力を持っていた大山寺があったことが想像されます。その当時からのたたら製鉄の技術、鍛造の技術などは現代に伝承、洗練され、私達の生活を支えています。当地のたたら製鉄をルーツに持つ日立金属安来工場は世界的な鋼工場として発展していますが、中海に面し、大山を仰ぐ地に建つ大工場を見ると、まさにこれも大山の恵みに違いないと感じてしまいます。時空を超えたインダストリアルマークとしての大山は想像力をかきたてます。

カルチャーマークとしての大山

文化圏という視点で見ると、大山を望むことのできる山陰中央エリアはひとつの文化圏です。近年では中海・宍道湖・大山圏域と言われ、官民あげてこの地域の活性化の取り組みが進みつつあります。鳥取島根の県境を跨ぐ地域、不思議なまでに言葉(方言)が似通っています。基本同じですね。このエリアの方言は「**雲伯方言**」と言われていますが、「雲伯」の名の由来は「出雲」の「雲」と「伯耆」の「伯」で、地元では主に「出雲弁」・「安来弁」・「米子弁」・「隠岐弁」と呼ばれています。代表的な方言は「だんだん(ありがとう)」「ばんじまして(こんばんは)」などがありますが、これは出雲、松江、米子はもちろん大山、隠岐あたりまでは日常的に使いま

す。各地域で言葉やイントネーションには特徴がありますが、どの響きも懐かしく感じるのは遥か昔からこのエリアがひとつの文化圏で、その歴史が私達のDNAにしっかり刻まれているからでしょう。

また、食文化も似通っています。**赤貝文化圏**とも言いますが、このエリアは赤貝(サルボウ貝)が冬の食卓には欠かせません。かつて中海で大量の赤貝が採れたことがその理由のようですが、それが活かした状態で流通できるエリアがこの中海宍道湖大山圏域だったのでしょうか。その交流の歴史は弥生時代まで遡ります。大山山麓の妻木晩田遺跡は中海・出雲方面に向けて開けた台地にあります。烽火(のろし)を使えば一瞬にして中海・宍道湖圏域の他の集落とコミュニケーションがとれたことがわかりますが、その時代から日常的に繋がりがあったのは間違いありません。**大山が見えるエリアはひとつの文化圏**。大山は私達のカルチャーアイデンティティを示す重要なマークでもあります。

大山を取り巻く地域の様々な事象をサンプル的に大山座標にプロットしてみました。冒頭で提案させていただきましたが、これを俯瞰してみるとこれまでわからなかった「大山の恵み(Gift)」が見えてくると思います。地域で暮らす私達にとって、当地のカタチが見えてくること(発見)は実に楽しく、嬉しいことでもあります。その楽しい発見を編集して、発信していくこと。これが地域のファンづくり(地域活性化)の核心部分だと思っています。

